量子力学

第11回目(6/29)

2AM 前期木曜2限

先進工学部マテリアル創成工学科 田村隆治 tamura@rs.tus.ac.jp

認証コード:3816

第11回目で学ぶ内容

一粒子の回転運動に関して、時間に依存しない Schrödinger方程式の解法を学ぶ。特に、角運動量の 交換関係のみからエネルギー固有値が得られることを 理解する。

1粒子の回転運動

半径rで回転する質量mの粒子の運動エネルギー

※古典的には、長さかの伸びない糸につながれた粒子の運動

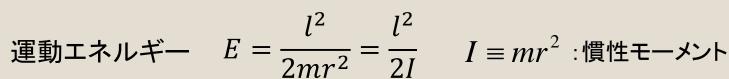
運動エネルギー 古典論

角運動量

角運動量の大きさ

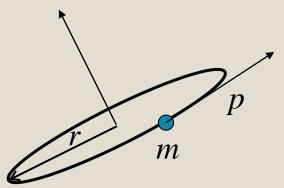
 $l = r \times p$

l = rp



回転軸 || *l*

$$\boldsymbol{l} = \left(l_x, l_y, l_z\right)$$



量子力学

$$\hat{H} = \frac{\hat{l}^2}{2I}$$

 \hat{l}^2 :角運動量二乗演算子

時間に依存しない Schrödinger方程式

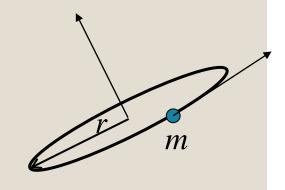
$$\frac{\hat{l}^2}{2I} |\Psi\rangle = E |\Psi\rangle$$

$$: |\hat{l}^2|\Psi\rangle = 2IE|\Psi\rangle$$

1粒子の回転 \hat{l}^2 の固有値と固有関数を求めることに帰着する。

角運動量間の交換関係

$$\begin{split} \left[\hat{l}_{x},\hat{l}_{y}\right] &= i\hbar\hat{l}_{z} \quad \left[\hat{l}_{y},\hat{l}_{z}\right] = i\hbar\hat{l}_{x} \quad \left[\hat{l}_{z},\hat{l}_{x}\right] = i\hbar\hat{l}_{y} \\ \left[\hat{l}^{2},\hat{l}_{z}\right] &= \left[\hat{l}^{2},\hat{l}_{x}\right] = \left[\hat{l}^{2},\hat{l}_{y}\right] = 0 \end{split}$$



\hat{l}_x 、 \hat{l}_y 、 \hat{l}_z はどの2つも交換しない。

従って、確定させることができるのは l_x 、 l_y 、 l_z のうちのどれか1つとなる。 慣習的に \hat{l}_z が確定した状態(\hat{l}_z の固有状態)を考える。

※このように量子力学では、回転軸が確定しない!

 \hat{l}_z と \hat{l}^2 は交換するので同時固有状態が存在する。

 \hat{l}^2 と \hat{l}_z の同時固有状態

同時固有状態を|\lamelam\とする。

$$\hat{l}^{2}|\lambda m\rangle = \lambda \hbar^{2}|\lambda m\rangle$$
$$\hat{l}_{z}|\lambda m\rangle = m\hbar|\lambda m\rangle$$

 λ, m : 実数

一粒子の回転を表すSchrödinger方程式

$$\frac{\hat{l}^2}{2I}|\Psi\rangle = E|\Psi\rangle$$
 $|\lambda m\rangle$ はそのままS.E.の解となる。

従って、固有ケット $|\lambda m\rangle$ と固有値 $\lambda \hbar^2$ を求める問題に帰着する。

電子の定常状態の表し方

中心カポテンシャルの場合

ハミルトニアン、角運動量二乗演算子、角運動量z成分演算子は 互いに交換する。すなわち、

$$\left[\widehat{H},\widehat{l}^{2}\right] = 0 \qquad \left[\widehat{H},\widehat{l}_{z}\right] = 0 \qquad \left[\widehat{l}^{2},\widehat{l}_{z}\right] = 0$$

従って、同時固有状態 $|nlm\rangle$ が存在し、以下の3つの固有値方程式を考えることができる。

$$\widehat{H}|nlm\rangle = E_n|nlm\rangle$$
 n:主量子数

$$\hat{l}^2|nlm\rangle = a_l|nlm\rangle$$
 $l:$ 方位量子数

$$\hat{l}_z |nlm\rangle = b_m |nlm\rangle$$
 $m:$ 磁気量子数

角運動量は3成分あるが、どの2つも互いに交換しないため、 一成分しか確定できないことに注意。

3つまで確定できるので、3つの量子数n,l,mにより電子の定常状態が指定される。

エルミート演算子の二乗の期待値

$$\langle \Psi | \hat{P}^2 | \Psi \rangle = \langle \hat{P} \Psi | \hat{P} \Psi \rangle = \int |\hat{P} \Psi|^2 dx \ge 0 \qquad \forall \Psi$$

 $|\cdot||\langle\Psi|\hat{P}^2|\Psi\rangle\geq 0$ エルミート演算子の二乗の期待値はつねに非負

一方、 $\langle \lambda m | \hat{l}^2 | \lambda m \rangle = \langle \lambda m | \hat{l}_x^2 | \lambda m \rangle + \langle \lambda m | \hat{l}_y^2 | \lambda m \rangle + \langle \lambda m | \hat{l}_z^2 | \lambda m \rangle$ $\langle \lambda m | \hat{l}^2 | \lambda m \rangle - \langle \lambda m | \hat{l}_z^2 | \lambda m \rangle = \langle \lambda m | \hat{l}_x^2 | \lambda m \rangle + \langle \lambda m | \hat{l}_y^2 | \lambda m \rangle \ge 0$ $\therefore \lambda \hbar^2 - m^2 \hbar^2 \ge 0$ $\therefore m^2 \le \lambda$ $\therefore -\sqrt{\lambda} \le m \le \sqrt{\lambda}$

従って、実数mには最大・最小がある。そこで、mの最大値をlとする。 もし $\hat{l}_{+}|\lambda l\rangle \neq 0$ だと、 $\hat{l}_{+}|\lambda l\rangle$ はm=l+1の固有関数であり、lが最大値であることと矛盾。

従って、 $\hat{l}_{+}|\lambda l\rangle = 0$ 両辺に \hat{l}_{-} を掛けて、 $\hat{l}_{-}\hat{l}_{+}|\lambda l\rangle = 0$ $\hat{l}_{-}\hat{l}_{+}|\lambda l\rangle = (\hat{l}^{2} - \hbar\hat{l}_{z} - \hat{l}_{z}^{2})|\lambda l\rangle = (\lambda\hbar^{2} - \hbar l\hbar - l^{2}\hbar^{2})|\lambda l\rangle$ $= \hbar^{2}(\lambda - l(l+1))|\lambda l\rangle = 0$ $:: \hat{l}_{-}\hat{l}_{+} = \hat{l}^{2} - \hbar\hat{l}_{z} - \hat{l}_{z}^{2}$ $: \lambda = l(l+1)$ l:mの最大値

実数mには最小値も存在するので、 $|\lambda l\rangle (\neq 0)$ に \hat{l}_- を作用し続けると、どこかでゼロにならなければならない。そこで、 $|\lambda l\rangle$ に \hat{l}_- を(n+1)回作用させたときはじめてゼロになるものとする。 $|\lambda l\rangle \neq 0$ なので $n\geq 0$ である。

$$\hat{l}_{-}^{n+1}|\lambda l\rangle = 0$$
 $\hat{l}_{-}^{n}|\lambda l\rangle \neq 0$ $n = 0,1,2,...$

ここで、 $\hat{l}_{-}^{n}|\lambda l\rangle$ の固有値を調べる。

$$\begin{split} \hat{l}^2 \big(\hat{l}_-^n | \lambda l \rangle \big) &= \big(\hat{l}_+ \hat{l}_- - \hbar \hat{l}_z + \hat{l}_z^2 \big) \hat{l}_-^n | \lambda l \rangle \\ &= \big[-(l-n)\hbar^2 + (l-n)^2 \hbar^2 \big] \hat{l}_-^n | \lambda l \rangle & :: \hat{l}_-^{n+1} | \lambda l \rangle = 0 \\ &= (l-n)(l-n-1)\hbar^2 \big(\hat{l}_-^n | \lambda l \rangle \big) \end{split}$$

 \hat{l}_{-} は \hat{l}^{2} の固有値を変えないので、 $(l-n)(l-n-1)=\lambda$

$$\lambda = l(l+1) + 0,$$

$$(l-n)(l-n-1) = l(l+1), : n^2 + n = 2l + 2nl : l = \frac{n}{2}$$

 $n=0,1,2,\dots$ なので、 $l=0,\frac{1}{2},1,\frac{3}{2},2,\dots$ lは整数もしくは半整数 mの最小値は l-n=l-2l=-l

以上より、mの取り得る値は $m=-l,-l+1,\cdots,l-1,l$ 2l+1 個

加はこれで尽くされているか

上昇演算子を作用させるとゼロになるmの条件を調べる。

$$\hat{l}_{+}|\lambda m\rangle = 0$$
 $\lambda = l(l+1)$ $l:m$ の最大値

左から下降演算子を掛けて

$$\hat{l}_{-}\hat{l}_{+}|\lambda m\rangle = (\hat{l}^{2} - \hbar\hat{l}_{z} - \hat{l}_{z}^{2})\lambda m\rangle = (\lambda\hbar^{2} - \hbar m\hbar - m^{2}\hbar^{2})\lambda m\rangle$$

$$= \hbar^{2}(\lambda - m - m^{2})\lambda m\rangle = 0 \qquad \therefore \lambda = m^{2} + m$$

$$\lambda = l(l+1)\xi \mathcal{Y}, (l-m)(l+m+1) = 0$$

$$\therefore m = l, \; \xi \cup \zeta \mathcal{Z}, \; m = -l-1$$

 $-l \le m \le l$ なので、上昇演算子を作用してゼロになるのはm = l のときしかない。

従って、mの値はlから自然数を引いた値でなければならない。 でないと、 \hat{l}_+ を作用させていくとmの値が無限に増加することになる。 (lが最大値であることと矛盾する)

以上より、mの値は以下の値に限られることが結論される。

$$m = -l, -l+1, \cdots, l-1, l$$

\hat{l}_z の固有関数

角運動量z成分の演算子(極座標表示)

$$\hat{l}_z = -i\hbar \frac{\partial}{\partial \phi}$$

※導出方法は補助資料を参照のこと。

固有值方程式
$$\hat{l}_z | m \rangle = m \hbar | m \rangle$$

固有関数
$$\Psi_m(\phi) = Ce^{im\phi} \quad : -i\hbar \frac{\partial}{\partial \varphi} \Psi_m = -i\hbar Cime^{im\varphi} = m\hbar \Psi_m$$

 ϕ と ϕ + 2π は同じ位置なので、波動関数の一価性を要請する。

$$\Psi_m(\phi + 2\pi) = \Psi_m(\phi)$$

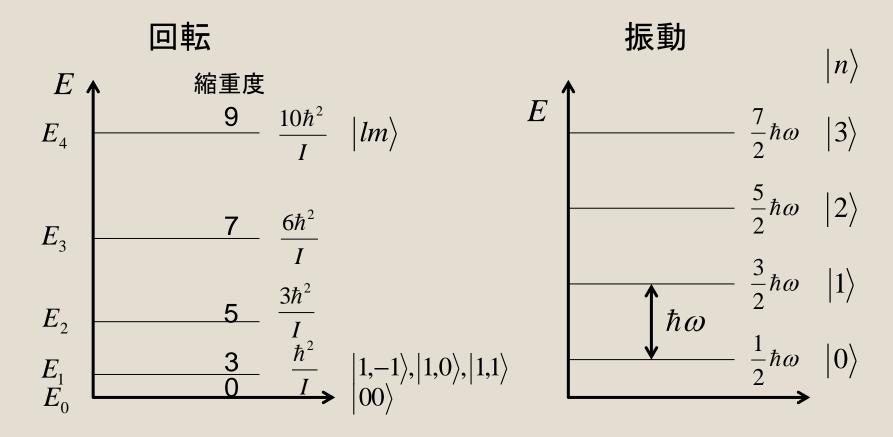
$$e^{im\phi} = e^{im(\phi + 2\pi)} \qquad e^{2\pi mi} = 1 \qquad m:$$
整数

$$\hat{l}^{2}|lm\rangle = l(l+1)\hbar^{2}|lm\rangle$$
 $l = 0,1,2,3,...$

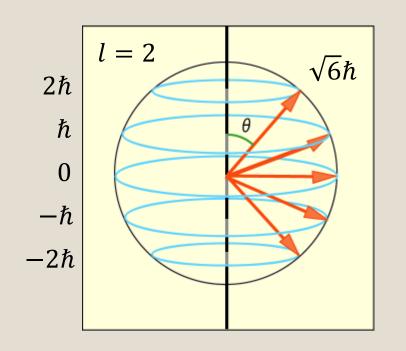
※位置の関数で表される古典的な軌道運動の場合は l は整数に限られる。

回転運動
$$\hat{H} = \frac{\hat{l}^2}{2I}$$
 $\hat{H}|lm\rangle = \frac{1}{2I}l(l+1)\hbar^2|lm\rangle$

固有ケット
$$\left|lm\right>$$
 $l=0,1,2,3,...$ $m=-l,l+1,...,l-1,l$ 固有値 $E_l=\frac{1}{2I}l(l+1)\hbar^2$ $(2l+1)$ 重縮退



方向量子化



|lm>: 角運動量二乗と角運動量z成分の 同時固有状態

固有值

角運動量二乗 $l(l+1)\hbar^2$ 角運動量z成分 $m\hbar$

角運動量のx成分とy成分は不確定となる。 (測定すると固有値mħのどれか一つが得られる)

角運動量について確定できるのはその大きさと一成分のみなので、古典的に考えると上図のようになる。角運動量ベクトルの終端が水色の円上のどこかにあり、定まらない。(測定するとどこかで見い出される)

また図からわかるように、角運動量は任意の方向を向くことができない。このように角運動量の向きが制限されることを、方向の量子化という。

2原子分子の回転

重心を中心に同じ角振動数ωで回転する2つの粒子のエネルギーの和。

エネルギー
$$E = \frac{1}{2}Mr_1^2\omega^2 + \frac{1}{2}mr_2^2\omega^2 = \frac{1}{2}(I_1 + I_2)\omega^2 \equiv \frac{1}{2}I\omega^2$$

※合成慣性モーメント $I \equiv I_1 + I_2$ をもった1粒子の角振動数 ω の回転のエネルギーとハミルトニアンは同じ。

合成慣性モーメント

$$I = M \left(\frac{m}{M+m}r\right)^{2} + m \left(\frac{M}{M+m}r\right)^{2} = \frac{Mm^{2} + mM^{2}}{(M+m)^{2}}r^{2} = \frac{Mm}{M+m}r^{2} \equiv \mu r^{2}$$

$$\mu = \frac{Mm}{M+m}$$

換算質量 $\mu = Mm/(M+m)$ をもった1個の 粒子の回転と同じ。

N₂分子の回転

O----O
$$E_l = \frac{l(l+1)}{2} \frac{\hbar^2}{I}$$

換算質量(原子量単位)

$$\mu = \frac{14 \times 14}{14 + 14} = \frac{14}{2} = 7 \qquad \mu = 7 \times \frac{10^{-3}}{6.02 \times 10^{23}} = 1.16 \times 10^{-26} \text{ kg}$$

$$I = \mu R^2 = 1.16 \times 10^{-26} \times (110 \times 10^{-12})^2 = 1.40 \times 10^{-46} \text{ kg} \cdot \text{m}^2$$

$$E_1 = \frac{\hbar^2}{I} = \frac{(1.055 \times 10^{-34})^2}{1.40 \times 10^{-46}} = 7.93 \times 10^{-23} \text{ J} = 0.495 \text{ meV}$$

 N_2 分子の振動のエネルギー間隔: $\hbar\omega=0.291~{\rm eV}{=}291~{\rm meV}$ 熱エネルギー(室温): $300k_B=0.0258~{\rm eV}{=}25.8~{\rm meV}$

※振動のエネルギー間隔は熱エネルギーより1桁大きいのに対し、回転のエネルギー間隔は2桁も小さい。従って、室温でも励起される。

一粒子分配関数

$$z = \sum_{n=0}^{\infty} \exp(-\beta E_n)$$

※和はすべての状態nについての和

※同じエネルギーをもつ状態が複数あるときは、 縮退しているという。

※縮退がある場合は、縮退した状態すべてについて和をとる。

一粒子の回転運動の場合

$$z = \sum_{l=0}^{\infty} (2l+1) \exp(-\beta E_l)$$

$$z = \sum_{l=0}^{\infty} (2l+1) \exp\left(-\frac{l(l+1)\hbar^2 \beta}{2l}\right) \qquad \because E_l = \frac{l(l+1)\hbar^2}{2l}$$

2原子分子気体(1 mol)の場合

分配関数
$$Z=z^{N_A}$$
 エネルギー $E=-rac{\partial}{\partial eta} \ln Z=-N_A rac{\partial}{\partial eta} \ln Z$ 定積比熱 $C_v=rac{dE}{dT}$

2原子分子の回転

l=lの状態をとる N_2 分子の数を N_l 、l=0の状態をとる N_2 分子の数を N_0 としたとき、 N_l/N_0 はいくらか。

$$\frac{N_l}{N_0} = \frac{(2l+1)\frac{1}{Z}\exp(-\beta E_l)}{\frac{1}{Z}\exp(-\beta E_0)} = (2l+1)e^{-\beta E_l} \qquad E_l = \frac{l(l+1)\hbar^2}{2l}$$

$$Z = \sum_{l=0}^{\infty} (2l+1)\exp(-\beta E_l)$$
 分配関数

例題: N₂分子においてN₁₀/N₀を求めよ。

$$E_{10} = \frac{10(10+1)}{2} \frac{\hbar^2}{I} \qquad \frac{\hbar^2}{I} = 0.495 \text{ meV} \qquad 300k_B = 25.8 \text{ meV}$$

$$\frac{N_{10}}{N_0} = 21e^{-\frac{10\cdot11}{2} \cdot \frac{0.495}{25.8}} = 7.31$$

室温では、N₂分子の多くが回転の励起状態にある。 (振動は基底状態)

HI分子の回転

三次元で自由に回転している1H127Iの最初の4つの回転のエネルギー 準位をeV単位で求めよ。ただし、R=160pmである。

$$\frac{127 \times 1}{127 + 1} = \frac{127}{128}$$

$$I = \mu R^2 = 1.65 \times 10^{-27} \times (160 \times 10^{-12})^2 = 4.22 \times 10^{-47} \text{ kg} \cdot \text{m}^2$$

回転のエネルギー
$$E_l = l(l+1)rac{\hbar^2}{2I}$$

$$E_0 = 0$$

$$E_1 = \frac{\hbar^2}{I} = \frac{(1.055 \times 10^{-34})^2}{4.22 \times 10^{-47}} = 2.64 \times 10^{-22} \text{ J} = \frac{2.64 \times 10^{-22}}{1.6 \times 10^{-19}} = 1.65 \text{ meV}$$

$$E_2 = \frac{3\hbar^2}{I} = 4.95 \text{ meV}$$
 $E_3 = \frac{6\hbar^2}{I} = 9.90 \text{ meV}$

第11回目のまとめ

以下の内容を良く消化して、説明できるようにしましょう。

一粒子の回転を表す時間に依存しないSchrödinger方程式

$$\left| \frac{\hat{l}^2}{2I} \right| \Psi \rangle = E |\Psi \rangle$$
 $I \equiv mr^2$: 慣性モーメント

角運動量の二乗およびそのz成分の固有値

$$\hat{l}^{2}|lm\rangle = l(l+1)\hbar^{2}|lm\rangle \qquad l = 0, \frac{1}{2}, 1, \frac{3}{2}, 2, \dots$$

$$\hat{l}_{z}|lm\rangle = m\hbar|lm\rangle \qquad m = -l, -l+1, \dots, l-1, l \qquad 2l+1 \quad \text{II}$$

- ※一粒子の回転のエネルギー固有値は $E_l = \frac{l(l+1)\hbar^2}{2I}$ となる。
- ※軌道運動の場合はlは整数に限られる。

レポート課題(40分)

1. 1モルの2原子分子の回転による比熱が高温極限で Rとなることを証明せよ。

分配関数 $Z = z^{N_A}$

$$z = \sum_{l=0}^{\infty} (2l+1) \exp\left(-\frac{l(l+1)\hbar^2 \beta}{2l}\right)$$

%ヒント: β が十分小さいとして、lに関する和を積分にせよ。

2. エネルギー等分配則をもとに、比熱がRになる理由を述べよ。

ヒント>>tamura@rs.tus.ac.jpまで

※提出方法

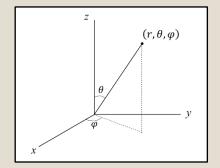
フォーマット: 手書き・ワープロいずれも可

ファイル形式: PDF ファイル名書式: "82xxxxx材料太郎.pdf"

角運動量z成分演算子の極座標表示

極座標表示

$$\begin{vmatrix} x = r \sin \theta \cos \phi \\ y = r \sin \theta \sin \phi \\ z = r \cos \theta \end{vmatrix}$$



$$\frac{\partial}{\partial x} = \sin\theta \cos\phi \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\cos\theta \cos\phi}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} - \frac{\sin\phi}{r\sin\theta} \frac{\partial}{\partial \phi}$$
$$\frac{\partial}{\partial y} = \sin\theta \sin\phi \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\cos\theta \sin\phi}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{\cos\phi}{r\sin\theta} \frac{\partial}{\partial \phi}$$

$$\begin{split} l_{z} &= i\hbar \left(y \frac{\partial}{\partial x} - x \frac{\partial}{\partial y} \right) \\ &= i\hbar r \sin \theta \left(\sin \theta \sin \phi \cos \phi \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\cos \theta \sin \phi \cos \phi}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} - \frac{\sin^{2} \phi}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \phi} \right) \\ &- \sin \theta \sin \phi \cos \phi \frac{\partial}{\partial r} - \frac{\cos \theta \sin \phi \cos \phi}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} - \frac{\cos^{2} \phi}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \phi} \right) = -i\hbar \frac{\partial}{\partial \phi} \end{split}$$